

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22330163

研究課題名（和文） 社会学的モノグラフ研究の復権——シカゴ学派からの出発

研究課題名（英文） Empowering the Sociological Monographic Research: Reconsidering the Chicago School of Sociology

研究代表者

中野 正大 (NAKANO, MASATAKA)

奈良大学・社会学部・教授

研究者番号：70039783

研究成果の概要（和文）：本研究は、シカゴ学派社会学のモノグラフという方法を検討し、従来の社会学で隅にやられていた主観性・個別性・物語性・全体性・理解などの復権を目指した。その実現には、行為を分析単位として中心に据え、行為の相互関係から社会の全体性を捉える理論的視点が大事である。その方法論は、社会的世界を調査範囲に設定し、多様な社会調査法と人的ネットワークを駆使して、その社会的世界の記述と変動および相互関係を捉えるモノグラフが最適である。

研究成果の概要（英文）：The study is to emphasize the significance of the subjectivity, individuality, narrative, integrity and understanding that have been played as a subordinate part in contemporary sociology, reconsidering the monographs of the Chicago School of Sociology. It is important to center actions as the unit of sociological analysis and figure out the totality and wholeness of the social world from the standpoint of the interactions. The monographic research is most suitable method for setting a social world as a range of research, and presenting its description, change and interrelationship.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2011年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2012年度	2,300,000	690,000	2,990,000
総計	6,300,000	1,890,000	8,190,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：①社会学方法論 ②シカゴ学派 ③モノグラフ ④社会調査 ⑤社会学史  
⑥エスノグラフィ ⑦質的調査 ⑧知識社会学

### 1. 研究開始当初の背景

現在の社会学の主流は、「高度に抽象化された仮説モデルを大量の量的データをもちいて検証する」という方法論である。客観性・普遍性・論理性・数値化・線形分析などを重視するこうした方法論は、仮説に関連する局面のみに研究関心を限定するため、調査対象の社会生活を細分化して扱わざるをえ

ない。こうした傾向のため、社会学は狭い専門性の中に閉じこもり、一般社会との接点を失いつつあるように見える。シカゴ学派社会学は、こうした現状を変えるヒントを与えてくれる。さまざまな資料をもちいて社会全体をダイナミックに捉えようとするシカゴ学派のモノグラフという方法は、従来の社会学で隅に追いやられていた主観性・個別性・物

語性・全体性・理解などを復権させるものである。近代的な大都市という目の前に広がる未曾有の事態を果敢に探究したシカゴ学派のパイオニア精神とチームワークは、常に社会学者が立ち返るべき原点だと考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、シカゴ学派のモノグラフ群で用いられた方法論やモノグラフの産出を可能にした研究集団の社会的・文化的・経済的条件を検討し、くわえてこれまであまり知られていないモノグラフの発掘をおこなうことである。さらに、こうした成果を相互に関連させることで、モノグラフ研究を推進し、社会提言を積極的におこなったシカゴ学派全体の現代的な意義を明らかにすることである。以上のような関心から、「1.シカゴ学派モノグラフの理論・方法論の再検討(シカゴ学派モノグラフの理論的視点とキー概念の明確化)」「2.シカゴ学派の新たなモノグラフの発掘」「3.シカゴ学派社会学の創造性と多産性を可能にした条件の知識社会学的探究」「4.現代の社会学の方向とは異なるモノグラフ研究を中心に据えた社会学の提起」の4点を明らかにすることを目標に据えた。

## 3. 研究の方法

研究会を定期的で開催して、シカゴ学派社会学の遺したモノグラフ群を集中的に検討して知見の共有を図り、総合的な観点から議論を重ねていった。議論の進め方は、「1.重要な基本テキストに絞って検討し、シカゴ学派の方法論の根幹を定式化する」「2.検討範囲を多種多様なモノグラフ群に広げ、定式化した方法論の実際のモノグラフへの適用状況を調べる」「3.シカゴ学派の研究を方向づけていた社会的文脈を探り、その創造性について知識社会学的に検討する」という手順でおこなった。

## 4. 研究成果

### (1)シカゴ学派の方法論の根幹

#### ①理論的視点

シカゴ学派から現代社会学への示唆として学ぶべき理論的視点は、「社会生活を問題状況の解決過程として捉え、社会的・文化的・地理的環境の下で営まれる社会生活の生きた姿を行為者たちの行為によって捉え、さらに社会生活の生成過程を段階を追って丹念に把握しようとする視点」である。それは、意味世界と態度取得の理論、プラグマティズムの行為論をベースにしながらも、社会関係や資源論も取り込んだ視点である。

シカゴ学派の礎を築いたトマスとズナニエツキ『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の理論的視点は、周知のように社会的価値・態度である。彼らの社会の分析

焦点は、特定の社会や共同体や集団に見出される特有の社会的価値と態度を把握し、それらが人びとの行為にいかに関与を与え、さらにこれら一連の行為を通じて社会生活がどのように生成していくのかを明らかにすることにある。すなわち、彼らは、社会は行為を通じて生成するものとイメージし、その行為は社会的価値と行為者の態度に条件づけられて遂行されるとみる。

次に、パークである。初期の彼は、社会を相互作用のシステムとして把握し、競争と同化、闘争と応化、個人化と凝集性、規範的規制と自発性などの概念を用いて、社会の緊張や矛盾、さらには変化を明らかにしようとした。その後、パークの関心は、こうした過程的な社会の把握から均衡論的な把握へ移る。文化は社会に安定性をもたらす大きな力とみなされ、生物システム、経済システム、政治システム、文化システム間の相互関連を分析しようとする。こうした理論的視点をもつパークが特に着目するのが、都市の「自然地域」である。そこで展開される人びとの具体的な生活を、空間的な広がりの中で、伝統的な文化の影響とその革新、人口密度、人口移動、民族的な異質性、経済状態、生存競争や闘争、集合行動の発生など、多様な局面から捉えることで、空間上の人びとの配置など生態学的な秩序にも目を向けながら研究している。パークは、人間が空間に定める位置や社会関係が文化的要素とならぶ社会条件の要素と考え、人種関係や自然地域によって人びとの社会生活が条件づけられ、生活のチャンスが異なることを明らかにしている。

3番目は、ミードである。有意味シンボルをベースにした彼のユニバーサル・オブ・デイスコース（意味世界）や制度の理論は、社会を意味の観点から把握することの重要性を教えてくれる。ミードは特定の対象や状況に対するコミュニティ成員の共通の反応に基づいて、遂行される組織的な反応を「制度」とよぶが、この制度の根底には「一般化された社会的態度」を各自のなかに呼び起こす意味世界がある。しかし、この制度は固定的なものではない。人びとは問題状況に直面すると、それを解決するために有意味シンボルを用いて内的な会話をを行う。こうした反省的思考によって新たな行為が創発され、制度は絶えず生成されていく。

こうした初期シカゴ学派の理論的視点を継承した人びととして、ブルーマー、ヒューズ、ゴフマン、ベッカー、ストラウスなどの名前をあげることができる。そのなかで、シカゴ学派の伝統を受け継ぎ「社会的世界論」として定式化したのはストラウスである。彼によれば、①社会的世界には優先的になされる特定の活動 (activity) が存在し、②そうした活動はなんらかの空間・場所 (site) で

行われ、③そうした活動を遂行するのに技術が活用されている。そして、④当初は一時的なものにすぎなかった分業は次第に発展して、社会的世界において活動は組織されるようになる。⑤こうした社会的世界は発展するにつれてサブ（下位）世界に分化し、それぞれの世界は自らを正統化するようになる。そして⑥社会的世界は他の社会的世界と、あるいはサブ世界同士が互いに接触し交差する機会も多いが、世界間でさまざまな問題をめぐって交渉や闘争や競争が生じる。そうした政治的活動のなされる空間はアリーナと呼ばれる。⑦社会的世界やアリーナはある程度構造化されていても固定されることはなく、その世界の境界も活動も共にたえず変化していく過程である。

## ②方法論

シカゴ学派が上記の理論的視点にもとづいて具体的に社会を研究する際に重視するのは、次の2点である。対象とする社会的世界やそこで生じる出来事が「何であるのか」を特定すること、そして、それらが「どのようにして生成してくる (becoming) のか」を明らかにすることである。すなわち、静態的な把握と動態的な把握を組み合わせるのである。

「何であるか」の把握は、まずは、シカゴ学派の代名詞とも言えるフィールドワークである。パークが学生に「ズボンを汚してきなさい」と指導したように、現場に行き五感を働かせることが最初の一步であった。こうして収集されたデータをもとに、まずは社会的世界が詳細に記述されていく。そして、その社会的世界の特徴を明らかにするため、時間的・空間的な比較がもちいられる。例えば、『ゴールド・コーストとスラム』では、シカゴ市街のさまざまな自然地域（社会的世界）が「コミュニティと呼べるかいなか」という観点から比較される。さらには、そうした複数の社会的世界について、時間的経緯や空間的配置などを相互に関係づけながら全体像を総合して捉えるシステム論的把握が目指される。こうした把握は、パークによって人間生態学と名付けられた。パーク「都市」、バージェス「都市の成長」、ワース「生活様式としてのアーバンイズム」などの論文は、システム論的把握のための指針である。

次に、「どのように生成してくるのか」の把握は、例えば、『ポーランド農民』では、ナラティブという様式が多用されている。この説明様式において大事なものは、行為と状況、それらの配列、そしてそれらの時間的つながりである。説得的なナラティブを構築するには、これら社会的世界の構成要素の特徴を記述し、行為や過程が「いかに」遂行され、いかなる出来事や結果をもたらしたのか、さら

に出来事相互間や社会的世界間の時間的生起について段階を追って語る必要がある。こうしたナラティブによる説明は、因果関係を変数間の蓋然性と解釈する 1960 年代の新因果主義に対して、社会的世界の生成過程におけるメカニズムと因果関係の説明に「行為」を再び取り込むことを意味している。そして、ナラティブの一般性については、否定的事例によって仮説の適用可能性を高めていくズナニエツキの「分析的帰納法」が役に立つ。

## (2) 実際のモノグラフへの適用状況

上記の理論的視点と方法論が、どのように実際のモノグラフへ適応されているかは、作品によりさまざまであった。

シカゴ学派の範例と言われる『ポーランド農民』は、大量のドキュメントをもちいて、ある特徴的な行為が生まれる個人の心理と社会の状況を提示し、さらに、そうした行為がもたらす社会的帰結としての社会解体や社会再組織化を跡づけようとしている点で、まさにシカゴ学派の理論的視点の範例となっている。しかし、収録されたドキュメントは、当初資料集として出版が目指されたこともあり、可能なかぎり原文がそのまま収録されている。著者たちの分析は、「資料の注釈と解説」の水準にとどまっている。そこでの理論とデータの関係は、後にズナニエツキが主張した分析的帰納法のような系統だった方法によるものではなく、1938年の社会科学研究会議でブルーマーが批判したとおりの現代的な意味での調査研究 (research) としては不十分である。しかし、失敗作と言われれば、けっしてそうではない。大量のドキュメントに残された農民たちの実際の行為が、著者たちによる注釈と解説によって社会学的な意味づけがあたえられて、重層的な社会観の提示に成功している。『ポーランド農民』は、データの構造化を突き進めようとするのではなく、むしろ、構造化され得ないデータの余白部分も含めてデータを大量に積み重ねることで社会学的な想像力を喚起するやり方をとっていると言える。いわば「分析の手引き付き質的データアーカイブ」として、後続のシカゴ学派の研究者たちの研究基盤を作ったと評価できる。

1920年代後半以降のモノグラフに目を向けると、例えば、『タクシー・ダンスホール』では、まず、ダンサーやお客の世界に焦点をあてながらタクシー・ダンスホールという社会的世界の詳細な記述があり、次に、過去にさかのぼって現在に至る過程を解き明かし、最後に、経営側と統制側の攻防を描く。行為者を中心に据えて社会的世界を描き、外部との関係からその存続条件を考察する手順は、シカゴ学派の理論的視点をよく体現している。一方、『ゴールド・コーストとスラム』で

は、シカゴのニア・ノース・サイドの現状と歴史が述べられた後、この地区を構成する6つの自然地域の姿が詳述され、最後にそれらの地域の相互関係について考察される。この作品では、一つの社会的世界の詳述にとどまらず、社会的世界間相互の全体性が追究されている。この『ゴールド・コーストとスラム』は、社会学者の狭い世界にとどまらないベストセラーとなった。一般の読者を勝ち得た理由の一つは、得体の知れない大都市シカゴについて統一的な像を提供できた点にあるだろう。

これらのモノグラフで用いられた調査技法は、実に多種多様である。参与観察、書籍、新聞記事、統計データ、スポット・マップ、社会機関の記録、ケース・ヒストリー、法廷の記録、インタビュー記録、日記、生活史、調査票をもちいたフォーマル・インタビューなどである。こうした多角的調査法は、社会的世界の各局面や社会的世界間の関係を明かにするのに、それぞれ適した調査技法があることを反映する。1928年にシカゴ大学出版局から出されたパーマーによる社会調査の教科書『社会学におけるフィールドスタディ』では、主な調査法として、(1)ケーススタディ法、(2)歴史的方法、(3)統計的方法の3つが上げられていることもからも、それはうかがえる。リアリティの追求のためには手段を選ばない「恥知らずの折衷主義」(サトルズ)こそが、シカゴ・モノグラフの特徴と言える。

### (3) シカゴ学派の創造性

シカゴ学派社会学が多数のモノグラフを遺せた理由の一つは、地元シカゴの有力者と結びついた研究助成の豊富さにある。例えば、トマスが主導した『ポーランド農民』はヘレン・カルバー、『不適応少女』はエセル・ダマーといった個人の社会事業家の助成によって研究がおこなわれている。このようなつながりは、ジェーン・アダムズの設立したハルハウスを中心に築かれたものである。この地元のインフォーマルなネットワークは金銭的な支援だけでなく、データの提供という面でもシカゴ・モノグラフを支えた。

シカゴ・モノグラフの著者たちの多くは、調査をしていた頃は、大学院生であった。こうした学生が生活費を獲得しながら、調査に従事できる環境が整えられたことも大きい。ローラ・スペルマン・ロックフェラー記念財団の基金によってシカゴ大学に設立されたローカル・コミュニティ調査委員会は、『ゴールド・コーストとスラム』の著者ゾーボーらに研究資金を提供した。クレッシーは、青年保護協会の特別調査員を務めながら、『タクシー・ダンスホール』の研究をおこなっている。シカゴ都市同盟は、黒人研究をするパ

ークの学生を資金援助した。

さらに、シカゴ学派は、緊密な研究者共同体を構成する。モノグラフが多産された1920・30年代に、社会学科の中心にいたのはパークとバージェスである。二人は、シカゴ各所の社会的世界について学生たちに調査の担当を割り当て、学生を調査地に連れて行くなどの面倒を熱心に行った。二人がもつ人的ネットワークとコーディネート力によって、大学院生であっても調査が可能になった。1920年にパークを会長に結成された社会調査研究会は、(1)定期的な夜間ミーティング、(2)夏期研究会、(3)会報、の3つを主な活動としていた。夜間ミーティングは、2~4週間に1度開かれ、専門家が講演したり、大学院生が調査結果発表したりした。夏期研究会には、卒業生たちも集まり、シカゴ大学社会学科のネットワークを維持する一手段となっていた。こうした緊密な人間関係のおかげで、独自のテーマの研究を進めながらも他者の研究をすぐさま参照でき、自らの調査結果の解釈を検証したり、理論的洞察を深めたりすることが可能だった。そして、こうした研究成果を世に問う場が、シカゴ大学出版局の「社会学叢書」である。パークとバージェスをシリーズ編者として、優秀な大学院生の修士論文や博士論文を次々と出版していった。その数は、1923年から1942年までに34冊になる。

### (4) 現代の社会学に向けて

以上のようなシカゴ・モノグラフの検討をとおして、現代の社会学に向けた提言は次のようになる。モノグラフは、変数間の確率的表現ではなく、人びとの実際の行為を分析単位として中心に据える。そして、行為の相互関係から社会の全体性を捉えていくが、具体的な調査の範囲として社会的世界を設定する。行為による問題状況の解決と新しい規範の創出という観点から、社会を動的に捉えていく。このような射程の広さから、モノグラフの執筆には、多様な調査技法と人的ネットワークが必要である。人的ネットワークには、社会学者だけでなく、心理学者や経済学者などの隣接学問分野からの協力が欠かせないし、研究資金やデータ提供の面で一般の人びととの連携も欠かせない。こうしたネットワーク構築には、社会学者は、自らの狭い専門の枠から積極的に外へ出ていく必要がある。また、こうした研究体制が持続可能なものとなるためには、若手研究者の育成が不可欠である。それには、教育訓練や研究共同体による研鑽の場だけでなく、若手研究者の生活保障と業績蓄積の仕組みが必要である。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

- ① 中野正大、シカゴ・モノグラフの読解—ポール・G・クレスシー『タクシー・ダンスホール』、奈良大学紀要、査読無、41 巻、2013、185-212  
[http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index\\_id=3403](http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index_id=3403)
- ② 高山龍太郎、書評—アンドリュウ・アボット著、松本康・任雪飛訳『社会学科と社会学—シカゴ社会学百年の真相』、社会学評論、査読有、63 巻 4 号、2013、626-628
- ③ 高山龍太郎、シカゴ学派と生活史—『ポーランド農民』を中心に、人びとの生と語り(せりか書房)、査読有、単行本、2013、印刷中
- ④ 藤澤三佳、精神科病院での芸術活動—展覧会鑑賞者が感じた「生」をめぐる記述を通してみえるもの、社会臨床雑誌、査読有、20 巻 2 号、2012、80-100
- ⑤ 中野正大、シカゴ・モノグラフにみる調査法、奈良大学紀要、査読無、40 号、2012、81-104  
[http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index\\_id=3381](http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index_id=3381)
- ⑥ 宝月誠、質的データの活用—W. I. トマス/F. ズアナイツキ『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』1918-1920、社会学的思考(世界思想社)、査読有、単行本、2011、147-156
- ⑦ 宝月誠、事例からの仮説構成の可能性—シカゴ学派の方法論を中心に、立命館産業社会論集、査読無、46 巻 3 号、2010、39-61
- ⑧ 宝月誠、シカゴ学派社会学の理論的視点、立命館産業社会論集、査読無、45 巻 4 号、2010、45-65  
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/sansharonshu/454j.htm>
- ⑨ 鎌田大資、分水嶺としてのバージェス—家族社会学とシンボリック・インタラクショニズムの交点、人間関係学研究、査読無、8 号、2010、17-30
- ⑩ 鎌田大資、アーネスト・バージェスの社会調査におけるケース・スタディと統計の相克—時期区分の試み、椋山女学園大学研究論集、査読無、42 号、2011、177-192

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 藤澤三佳、精神科病院における自己表現としての絵画活動と鑑賞者の共感性、日本社会学会大会、2012 年 11 月 03 日、札幌学院大学
- ② 西川知亨、現代日本における反貧困活動の展開—初期シカゴ学派の人間生態学/総合的社会認識の視点から、日本社

会学会大会、2011 年 9 月 17 日、関西大学

- ③ 鎌田大資、予測研究の予期せざる結果—アーネスト・W・バージェスの予測研究をめぐって、関西社会学会大会、2010 年 5 月 30 日、名古屋市立大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 正大 (NAKANO, MASATAKA)  
奈良大学・社会学部・教授  
研究者番号: 70039783

(2) 研究分担者

高山 龍太郎 (TAKAYAMA, RYUTARO)  
富山大学・経済学部・准教授  
研究者番号: 00313586

加藤 一己 (KATO, KAZUMI)  
愛知大学・文学部・准教授  
研究者番号: 10214363

宝月 誠 (HOGETSU, MAKOTO)  
立命館大学・社会学研究科・非常勤講師  
研究者番号: 50079018  
(H24: 連携研究者)

(3) 連携研究者

油井 清光 (YUI, KIYOMITSU)  
神戸大学・人文学研究科・教授  
研究者番号: 10200859

藤澤 三佳 (FUJISAWA, MIKA)  
京都造形芸術大学・芸術学部・教授  
研究者番号: 00259425

近藤 敏夫 (KONDO, TOSHIO)  
佛教大学・社会学部・教授  
研究者番号: 70225621

徳川 直人 (TOKUGAWA, NAOHITO)  
東北大学・情報科学研究科・准教授  
研究者番号: 10227572

野田 浩資 (NODA, HIROSHI)  
京都府立大学・公共政策学部・准教授  
研究者番号: 60250255

中村 真由美 (NAKAMURA, MAYUMI)  
富山大学・経済学部・准教授  
研究者番号: 30401269

鎌田 大資 (KAMADA, DAISUKE)  
椋山女学園大学・人間関係学部・准教授  
研究者番号: 30278238  
(H23~H24: 研究協力者)